

クロカジキ 大西洋

Blue marlin *Makaira nigricans*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

- 最大体長・体重：下顎叉長 2.5 m・体重不明（雄）、下顎叉長 3.7 m・540 kg（雌）
- 寿命：およそ 42 歳（雌雄）
- 性成熟年齢：2~4 歳（雌、50%成熟年齢）
- 産卵期・産卵場：夏~秋、熱帯・亜熱帯域
- 索餌期・索餌場：夏、温帯域
- 食性：魚類（特にサバ類）、頭足類
- 捕食者：調査中

利用・用途

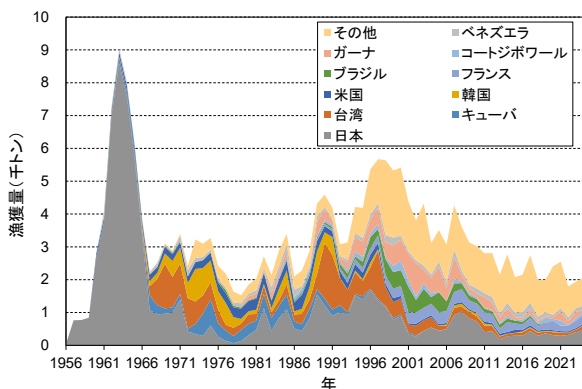
刺身、切り身（ステーキ、ソテー）

漁業の特徴

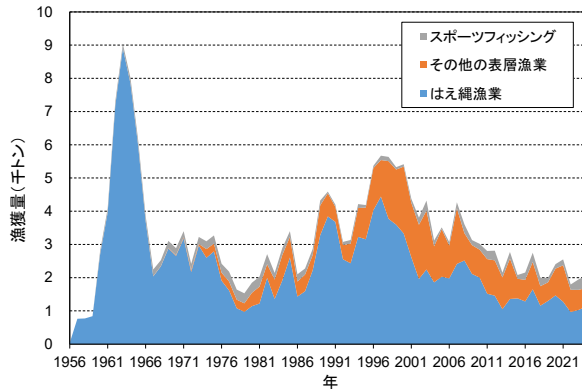
本資源を主対象として漁獲しているのは、米国、ベネズエラ、バハマ、ブラジル等のスポーツフィッシングとカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国等の沿岸零細漁業である。近年の漁獲の多くは、日本、台湾、フランス等のはえ縄漁業の混獲及びカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国の沿岸漁業によるものである。

漁獲の動向

本資源の漁獲量は 1960 年代半ばに急増し、1960 年代後半に急減し、1970 年代緩やかに減少傾向を示し、1979~1998 年に増加傾向を示した後、2000 年代中頃まで減少し、その後再び増加したが、2009 年以降は減少傾向を示している。1956 年から 1966 年の間に本資源の漁獲量が急増し、急減した理由は、熱帯域での日本のまぐろのはえ縄漁業の漁獲努力量の変遷によるものと考えられる。1990 年代半ば~2000 年代半ばには便宜置籍船によるはえ縄の漁獲等が増加した。また、1996 年以降からはガーナ、コートジボワールといった沿岸零細漁業国がまとまった漁獲を揚げる等、近年は新しい漁業国による漁獲が増えている。2024 年の総漁獲量（投棄量含む）は暫定で 2,066 トンであった。日本の漁獲量は、2001 年以降増加の傾向を示し 2008 年に 1,000 トンを上回った。その後、漁獲量は減少しつつも 2024 年は 482 トンを記録し、漁獲量は国・地域別で最多となっている。



大西洋におけるクロカジキの漁法別漁獲量（1956~2024 年）



大西洋におけるクロカジキの国・地域別漁獲量（1956~2024 年）

資源状態

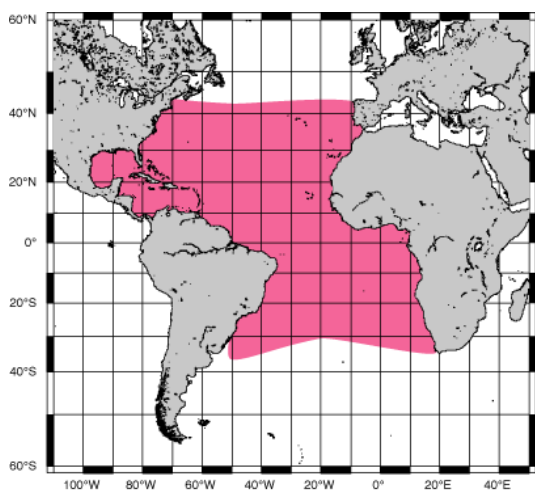
最新の資源評価は2024年6月にICCAT科学委員会（SCRS）によって実施された。資源評価は、漁獲量や資源量指数データを用いてプロダクションモデル（JABBA）及び統合モデル（SS3）で行われ、最終的にJABBAとSS3を統合した結果が管理勧告に採用された。資源評価の結果、資源量は乱獲状態であるが（ $B_{2022}/B_{MSY}=0.67$ ）、過剰漁獲状態ではない（ $F_{2022}/F_{MSY}=0.91$ ）ことが示された。また、SCRSは、JABBAとSS3の結果をもとに将来予測を行い、2034年に50%以上の確率で最大持続生産量（MSY）の資源水準に到達させるTAC（2,250トン）を算出した。しかし、SCRSは水揚量と投棄量の水準に関する不確実性が適切な管理勧告の提供を困難にしていることを鑑み、2024年の資源評価で示された資源量の増加傾向が次回の資源評価でも確認されるまで、現在1,670トンの陸揚量上限を維持または引き下げることが勧告された。また、陸揚量制限[Rec. 19-05]ではなく実際の漁獲量（水揚量+死亡投棄量）に対応する上限を用いるべきであることが勧告された。

管理方策

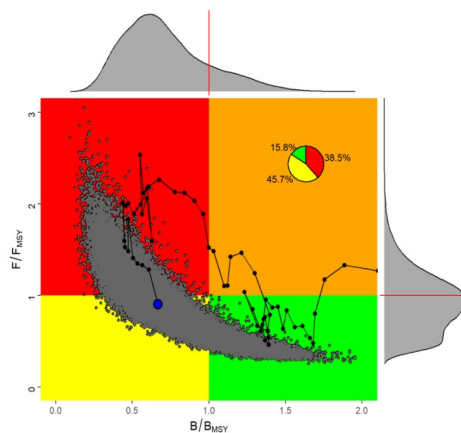
2018年の資源評価結果により現行のTACを引き下げる必要性が勧告されたことから、2019年のICCAT年次会合で、大西洋のクロカジキ資源に対して、2020年以降の放流を除いた陸揚量上限を1,670トンとすることが合意され、放流後の死亡率を最小化するように取り組むことが勧告された。なお、日本の割当量は年間328.1トンである。また、生きて漁獲された個体をできるだけ放流後の生存率が高くなるように放流すること、資源解析・評価の実施に当たって問題となった各国・地域の生存放流及び死亡投棄個体数の推定方法をSCRSが検証すること、スポーツフィッシングに対してはオブザーバーの乗船（カバー率5%）及びサイズ規制と釣漁物売買の禁止が勧告されている。

クロカジキ（大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 (最近5年間)	1,795~2,551トン 最近(2024)年: 2,066トン 平均: 2,152トン(2020~2024年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	292~482トン 最近(2024)年: 482トン 平均: 360トン(2020~2024年)
資源評価の方法	ベイジアンプロダクションモデル(JABBA)と統合モデル(SS3)の結果を等ウェイトで統合した結果
資源の状態 (資源評価結果)	$B_{2022}/B_{MSY}=0.67$ $F_{2022}/F_{MSY}=0.91$ 2022年の資源状態は乱獲状態であるが、過剰漁獲状態でない。
管理目標	MSY(3,331トン: 2,323~4,659トン)水準の資源量(B_{MSY})
管理措置	<ul style="list-style-type: none"> 2020年以降の陸揚量上限を1,670トンとする(日本の割当量は328.1トン) スポーツフィッシングについてオブザーバー乗船(5%)、サイズ規制、漁獲物の売買禁止
管理機関・関係機関	ICCAT
最新の資源評価年	2024年
次回の資源評価年	未定



クロカジキ（大西洋）の分布



JABBA及びSS3による2022年の資源状態（神戸プロット）
資源状態と管理勧告はJABBAとSS3の結果によって決定された。青丸は現在の資源状態を示す。